

1. 令和7年度『「自立した学習者」育成プロジェクト』知念中学校

推進期間令和7～9年度

学力向上推進のための取組構想

自立した学習者

目的や状況に応じて、自分に合った学び方を工夫したり、学習意欲を自ら引き出したりして学習できるような児童生徒

成果指標

授業改善4つの取組

「個別最適な学び」と「共同的な学び」の一体的な充実

- 多様な子どもたちへの対応
- 多様な子どもたちのニーズに合った学習指導
- 一人一人の良い点や可能性が見出されるような授業の工夫や学習が最適となるような調整
- 多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく育成し、子どもたちの多様な個性を最大限に生かす。

「学習基盤としてのICT」の活用

- 情報活用能力の育成
- 「自立した学習者」の育成に向け、子どもたちの学びを、資質能力を重視した子ども主体の学びへ転換するため、ICTを最大限活用する。
- OGIGAスクール構想の「1人1台端末とクラウド」の活用を、学習基盤と捉え、「探究のサイクル（“課題の設定”“情報の収集”“整理・分析”“まとめ・表現”）」の学習過程を取り入れ、端末の日常的・効果的活用を推進

「指導と評価の一体化」の実現

- 子どもたちの学習成果を捉え、学習改善や指導改善に活かす。
- 指導計画に基づく授業が実践され、その学習状況を評価し、その結果を生徒の学習や教師による指導の改善や学校全体の教育課程の改善等に生かす。
- 全国学力・学習状況調査、県到達度調査及び県版児童生徒質問用紙等の結果を学力向上推進取組の検証と改善に、指標として活用する。

「自学自習力」を育む取組の充実

- 「児童生徒が、目標達成に向けて、自分自身の現状を把握し、そのために必要な学習や訓練を計画し、自己調整しながら継続して学習する力」を育む。
- 児童生徒が授業で学んだことを振り返り、次の学びにつなげる「学習サイクル」を確立させる。
- 授業と家庭学習を、連続した学習のサイクルと考え、様々な学びにおいても応用させる。
- どのように「学習サイクル」を構築するか、全職員でその方法を検討する。実施後はその結果を検証し、改善する。

育成を支える4つのポイント

- ・自己存在感の感受
- ・共感的な人間関係の育成
- ・自己決定の場の提供
- ・安全・安心な風土の醸成

2つの共通実践

- ◎児童生徒の変容につながるPDCAサイクルの確立
- ◎「目指す児童生徒像」実現化を目指した校内研修の充実

令和7年度推進目標

○全国学力学習状況調査において、全国水準まで向上させる

○沖縄県学力到達度調査において、全教科が県平均正答率を上回る

【成果指標】

- ①全国平均正答率において国語、数学とも3p以内
- ②無解答率の減少
- ③児童生徒質問紙の学習意欲等に関する項目の数値の向上
- ④学校評価アンケートの「授業改善に関する事項」の数値向上

取組の重点	
柱1 キャリア教育の視点を踏まえた「確かな学力」の向上の推進	柱2 「授業改善」に重点をおいた「確かな学力」の向上の推進
○地域教育資源や本物に触れる活動をととして学ぶ意義や働く意義を実感させる。 ○探究学習、平和集会、地域行事等、地域の自然、文化、産業や人材を活用した学習を行う。 ○愛汗デーの活動を通して、校訓『愛汗大志』の心を育成する。	○「わかる授業」「参加する授業」を目指した授業改善の推進 ○目指す授業像（授業スタイル）の共有による授業を実践する。 ○公開授業及び主事招聘授業、授業研究会を積極的に実施する。 ○授業改善に係る校内研修を年間計画に位置づけ、共通理解を図る。 ○公開授業への積極的な授業参観・評価（「付箋紙大作戦」）を実践する。 ○毎週1回放課後、自学自習会(J.J)を設け、地域学習ボランティアまたは職員がローテーションで見守り、支援をする。

目指す授業像：他者と関わりながら、課題の解決に向かい「問い」が生まれる授業

学力向上推進の「3つの視点」		
自己肯定感の高まり	学び・育ちの実感	組織的な関わり
○児童生徒の良い点や可能性、進歩の状況などを適切に把握してフィードバックする。 ○生徒が自分の特徴に気づき良い所を伸ばす。 ○日常の教育活動の中で適時個々の良さを伝えながら生徒の自己肯定感を高める。 ○主体的に学習に取り組む態度を育てる。	○教師が教材研究と生徒理解を深め主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組む。 ○一人一人の学習状況を丁寧に見取る事が大切。 ○学び育ちの実感を積み重ねることで生徒が自らの目標や課題を持って学習に粘り強く取り組む姿勢。	○自らの学び・育ちを実感し自己肯定感を高めていくためには学校全体で組織的かつ計画的に関わることが効果的。そのため校内研究や教科会、学年会等において何をどのように見取りどのように評価するのかその結果を支援にどうつなげていくのかを職員間で深め共有する。
授業改善6つの方策		
方策1 目指す授業像の共有	方策2 教材研究の充実	方策3 学力向上マネジメントの推進
○「主体的・対話的で深い学び」の視点から目指す授業像、生徒の姿を共有し、授業改善の取組を展開する。 ○【授業スタイル】めあての提示（導入）→言語活動の充実（展開）→めあてと連動したふり返り（まとめ） ○「めあて」に正対した「まとめ・	○各種資料の分析・活用を通し、授業改善の充実を図る。 ○全国学力調査、県学力到達度調査、県学力定着状況調査、市標準学力調査の結果分析・活用した授業づくり ○「問い」が生まれる授業サポートガイドを活用した授業づくり ○組織的な取り組みにより、授業	○学力向上の具体的な到達目標を共有し、学力向上マネジメントによる目標管理型評価システムを取り入れる。 ○学校評価、学年・学級経営、教科経営の到達目標の評価を行い、課題に対する対策を講じる。 ○全校体制での取り組みを推進する。

振り返り」 ○考えをまとめたり表現（アウトプット）したりする時間の設定・確保 ○一単位時間で完結する授業 ○ICT機器を効果的に活用した授業	改善の充実を図る。 ○教科会を週時程に位置づけ、教材研究の充実を図る。 ○授業改善に係る校内研の充実を図る。	○学力向上推進委員会の充実を図る。 ○管理職による授業観察とフィードバックを行う。
---	--	--

方策4 学習を支える力の育成		
学習環境の充実	規範意識・マナーの向上	自学自習の習慣化
○「学習のきまり」の徹底 ○1分前着席の実施 ○学習の準備、聞く態度の育成▼ ○整理整頓の日の設定（毎週金曜日） ○毎時間後の資料のファイリング	○生徒によるルールメイキングの推進・道德教育の充実	○ICT教材の活用 ○スケジュールノートの活用 ○週一回の自主学習会の充実
読書活動の充実	体験活動の充実	部活動の充実と適正化
○朝の読書活動の充実 ○読書月間、旬間の充実 ○図書館の積極的な活用	○地域教育資源の積極的な活用 ○探究学習、地域行事への参加・発表等の充実	○部活動休養日の設定（毎週水曜日） ○朝のあいさつ運動（各部輪番制）
生活リズムの確立	対話の充実	
○朝の「てくてく登校」の奨励 ○「早寝・早起き・朝ごはん」の奨励 ○食育に関する授業実践	○学級活動、生徒会活動の充実 ○教育相談の充実 ○授業での言語活動の充実	

方策5 集団づくり・自主性を高める取組の充実	方策6 教育行政との連携
○支持的風土をつくる学級経営 ○お互いのよさを認め合い、考えを交流させる授業展開 ○生徒指導の三つの機能を生かした授業の日常化 ○共感的な人間関係、自己決定の機会、自己存在感を得る場を生かした授業実践 ○学級活動や生徒会活動の充実 ○話し合い活動、所属感や自己有用感を育む行事の実施	○学校支援訪問による授業改善の推進 ○学力向上推進室、島尻教育事務所、市教育委員会の訪問による授業観察や学力向上の取組への指導助言等を授業改善に反映させる。 ○指導主事招聘による研究授業や校内研修を実施する。 ○学力向上推進本部会議からの提言を授業改善に反映させる。

2. 本校の一事徹底について

「自学自習の充実」

各教科の基礎・基本の定着のため、自学自習の習慣化を図り、生徒の学力向上を支援・指導する。

(1) ねらい

- ①自学自習の習慣化を図る。
- ②基礎基本の定着を図る。
- ③学校と家庭が連携して、各生徒の育成について共通実践をすすめる。
- ④内容の充実を図ることにより、効果的に学力を身につけさせる。

(2) 取組内容

- ①タブレットドリル等を奨励し、計画的に行わせる。また、授業の内容と連動した家庭学習の課題としても活用する。
- ②水曜日の放課後における自学自習会(J.J)への声かけを行う。
- ③キャリアノート（フォーサイト）を活用し、計画的な自学自習を促す。
- ④単元テストや小テストにおけるリトライ制を入れ、自学自習のさらなる活性化を図る。
- ⑤全国学力調査や県の学力調査において、過去問（沖縄県学力向上 web システムのホームページよりダウンロード可）を課題に入れて対策する。

3. 今年度の取組目標

【取組1】地域教育資源の活用

- 各教科、探究学習、平和集会等で、地域の自然、文化、産業や人材を活用した学習を行う。

【取組2】学習環境の充実

- チャイム前入室・着席、学習用具の準備等、「本校学習のきまり」の徹底及び自学自習の習慣化を図る。
- 教科資料ファイリングの指導徹底を図る。
- 教室前方の掲示物を校内で決定したものだけにし、UD（ユニバーサルデザイン）に基づいた学習環境づくりに努める。

【取組3】確かな学力の充実

- 全国学力・学習状況調査、県学力到達度調査において、全教科で県平均正答率を上回り、無回答率を減少させる。
- 自学自習会(J.J)の取組を全校体制で支援する。

【取組4】校内研修の充実

- 各教科研究テーマを設定し、一人一公開授業及び授業参観、授業研究会を行う。

【取組5】「自律・尊重・創造」の学校教育目標の連動

- 全学年で生徒が学校目標から学年・学級目標と連動させ、学期毎に目標設定・自己評価をする。

4. 学力向上推進の取組（キーワード：全校体制・継続と徹底）

県学力到達度調査及び全国学力調査に向けた取組

① ねらい

- ・既習内容の確実な定着に向けて、各教科で定着状況の分析及び対応策を検討し、全校体制で計画的な対策を実施する。

②具体的な取組

- ・各教科、前年度の結果分析から取組について検討し、共通実践を行う。
- ・各教科の取組において、家庭学習課題、自学自習会等を効果的に活用する。
- ・県学力到達度調査実施後、結果分析・対応策を検討し、生徒にフィードバックを行う。また、次年度の学力調査に向けて継続して学力向上に取り組む。

○各学力調査日程（令和7年度）☆は業者テスト

実施月	4 月	9 月	10 月	11～12 月中旬	2 月
	【3 年】 全国学力状況調査 【1, 2 年】 ①市標準学力調査 ②県学力調査（学びのたしかめ）自動採点・web 入力なし	【全学年】 ☆第1回 学力診断テスト	【3 年】 市学力調査 ○志望校判定	【全学年】 県学力到達度調査 ○1,2 年：自校採点・web 入力あり ○3 年：自己採点・web 入力なし	【1, 2 年】 ☆第2回 学力診断テスト 【3 年】 リハーサルテスト
1 年	①国数 ②数（CBT）	5 教科		数・英	5 教科
2 年	①国数英 ②数（CBT）	5 教科		国・数・英	5 教科
3 年	国・数・理（CBT）	5 教科	5 教科	5 教科	5 教科

5. 自学自習会の実施

- ① 1 学期中に生徒会を中心に、生徒たちの自発的な自学自習会（J. J）の立ち上げおよび呼びかけを行う。
- ② 学年を問わず、生徒が自主的に集まって学び合い学習をする時間を設ける。学習時間は水曜日の放課後～PM4：40 までとする。
- ③ CS（南城市コミュニティ・スクール）による地域学習ボランティアを活用または職員がローテーションで見守り、個に応じた学び合い学習支援の充実を図る。

1. めあての表示と相対したまとめの工夫
2. UD(ユニバーサルデザイン)に視点を置いた学習環境の工夫
3. 生徒のアウトプットに重きを置いた授業展開(教師主導の一斉授業からの脱却)
 - ・生徒が思考して話し合う時間や自分の考えを表出させる時間を十分に確保する(教師がしゃべりすぎない)。

☆学習の定着度 聞く活動 < 話す活動 < 教え合い学び合う活動

4. 【単元テストについて】

- (1) 定期テストのように広範囲に渡るものではなく、単元ごとの範囲とする。実施時間はまるまる1時間とならないよう、生徒の学習効率を考える。
- (2) 単元テスト返却時は解説や振り返りをしっかり行い、リトライテストに向けて準備させる。
※返却して放置しない(休み時間や短学活、朝の活動等に返却し、解答を配布して終わり、とならないように。またテストの結果を分析し、教師の今後の指導法改善に役立てる。)
- (3) 「リトライテストがあるから」という理由で単元テストを勉強しない生徒がいた。なので、リトライテストのデメリットも最初に話しておく。(放課後実施、テストにかかる時間も2倍、他教科の単元テストにもかち合い、日程がつまってくることもある、等)。

【リトライテストについて】

- (1) リトライテストは希望制で行う。他の教科と被らないよう、生徒が単元テストを復習する時間を十分に与えて取り組ませる。
- (2) リトライテストは単元テストと同じレベルの内容にする(難易度を上げない)。

※テスト実施日程のお知らせは教室のホワイトボードに記入する。またグーグルクラスルームのテスト等日程掲示板を確認して記入する(クラスルームは生徒も保護者も閲覧できる)。

5. スタディサプリを活用した宿題等、ICTの効果的な活用(個別最適な学習を促す工夫等)を図る。
6. 朝の活動(8:15~8:30)は、自学自習の時間とし、生徒は自分の課題を決めて取り組む時間とする。基本は学年職員で見守りをする。
7. J.J(自学自習会)は水曜日の放課後図書館で行い、副顧問の教師がローテーションで見守る。4時40分には終了の合図をし、図書館の戸締まりをする。立ち上げは生徒会からさせる。
8. 「みかこ」「かふやみ」の育成を意識した指導
 - 「みかこ」…自ら見つけ、考え判断し、行動する
 - 「かふやみ」…かかわる、振り返る、やり抜く、見通す力